

「助け主」

ヨハネの福音書 14:16~31

はじめに

14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。

14:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。



イエシュアは十字架にかかれる前夜、弟子たちへの最後のメッセージの中で、ご自分に代わって、父なる神様から遣わされて来る「助け主」、弟子たちを助けてくださる存在についての説明をされます。その方は「真理の御霊」とも呼ばれ、今日の箇所では「聖霊」と呼ばれています。この「聖霊」は今日の私たちクリスチャンの信仰を支え、教会を導く「助け主」でもあり、この御方の助けなしには、目に見えない神様を信じることも理解することも絶対にあり得ません。なぜならこう言われているからです。

【新改訳改訂3】 I コリント 12:3 ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、また、**聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。**

神様と同様にこの「聖霊」も目には見えず、またその声も耳には聞こえません。しかし人がもし「イエシュアは私の主です」と言うのなら、そこには確実に「聖霊」の存在とその働きがあるということです。ですから私たちにとってもこの助け主「聖霊」は、今日もなおこの地上において生きて働いておられる御方であり、非常に重要な、絶対になくてはならない存在です。その「聖霊」について語られる、イエシュアの言葉に耳を傾けていきましょう。

1. はっきりと

14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。

14:19 いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。

今のこの世において、私たちはイエシュアをこの目で見ることにはできません。しかしやがてこの御方は戻って来られます。この地上に再び



戻って来られ、そして「あなたがたとともに生きる」ことがはっきりと約束されています。このイエシュアという言葉には何のたとえも謎かけのような表現も見られません。イエシュアを信じる者、イエシュアの弟子たちにはこのようにたとえ話ではなく明確に語られます。これは注目すべきことです。なぜならこう言われているからです。

【新改訳改訂3】マタイ 13:13 わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。

イエシュアはご自分が神様の御子であり、その御方のご計画の完成のために遣わされた存在であり、人を滅びから救うことのできる唯一の御方である、ということを知る者にはご自身をはっきりと表されますが、それを受け入れない、信じない者には隠されます。つまり信じる者には解るが、信じない者には解らない、それが神様であり、イエシュアであるということです。

イエシュアが再びこの地に戻って来られるというこの事実は、当時の多くのユダヤ人たちに隠され、信じない者には理解することのできない神様の奥義です。それが今聖書を通して私たちにはっきりと語られ、耳にしているというこの事実の意味を、その重さを、ぜひ噛みしめていただきたいと思います。

14:20 その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。

「その日」とは、当然イエシュアが再びこの地上に戻って来られる日のことです。神様と人が共にいる、しかも見える形で共に生きるということです。それが一体どのような状態、どのような世界なのかが分かる時が来ます。それがこの「その日」です。

2. 戒め

14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。」

神様が人に与えられた「戒め」について、旧約聖書は数多く記していますが、イエシュアはそれを要約してこのように語っておられます。

【新改訳改訂第3版】

マタイ

22:37 そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

22:38 これがたいせつな第一の戒めです。

22:39 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。

22:40 律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

神様を愛すること、そして隣人を愛すること、これが神様が人にお与えになった「戒め」です。では神様とはどの神様でしょうか。また隣人とは誰のことでしょうか。それはこの戒めが元々誰に与えられたものであるのかを覚えなければなりません。この「戒め」は初めイスラエルの民、ヘブル人、ユダヤ人とも呼ばれる民族に与えられたものです。彼らの神様は、この天地宇宙とすべての命あるものを創造された唯一の神様です。そして「隣人」とは、異邦人すなわちイスラエル人以外のすべての民族、外国人を意味します。なぜならイスラエル人は同族には父母、兄弟姉妹という呼び方をするからです。このように、神様の「戒め」とは神様と人が愛し合い、そしてイスラエル人と異邦人が愛し合うことが示されているのです。神様はこの二つの「戒め」を自分の心に持ち、それが実現する「その日」が来ることを願い、待ち望む人を愛されます。この二つの「戒め」をイエシュアは別の言い方でこのようにも語っておられます。

【新改訳改訂3】マタイ 6:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。

神の国とは、神様と人々が共に住む国であり、「義」とは神様に愛されること、良しと認められて受け入れられることを意味します。このように、神様は二つの戒めに示された内容が、目に見える形で実現する「国」を造ろうとしておられるのです。ですから戒めというよりは「計画」です。そのご計画を実現させるためにイエシュアはこの地上に再び戻って来られるのです。

3. 愛する

14:22 イスカリオテでないユダがイエスに言った。「主よ。あなた、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。」

ユダがもっともだと言える質問をしています。なぜイエシュアはこんな大事な神様のご計画を、弟子たちだけでなく、すべての人々にはっきりと表されなかったのでしょうか。たとえ信じて受け入れないとしても、たとえ話などで隠したりしないで、明確に神様のご計画について語ることもできたはずですが。

14:23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。

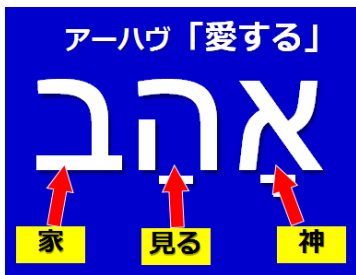
14:24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。

14:25 このことをわたしは、あなたがたといっしょにいる間に、あなたがたに話しました。

ユダの質問に対して、イエシュアは「愛する人」と「愛さない人」にはっきりと区別を設けておられることが解ります。つまり「愛する人」と「愛さない人」を同じようには扱わないということです。「愛する人」は神様のご計画を信じ受け入れます。そしてその人は神様の国に住む者となります。ですからその者たちには神様のご計画について、神様の国についてはっきりと示されるのです。しかし「愛さない人」は神様のご計画を信じない、受け入れない人です。聞いても受け入れない者に神様の国について教える必要がないということだと考えられます。

イエシュアは「愛する人」「愛さない人」という表現で人を区別されていますが、そもそもこの「愛する」と

という言葉の持つ意味が、神様と私たちとは大きく違うことを述べておきたいと思います。先ほど神様はイスラエルの民に語られ、ご自身の計画について語られたことを述べましたが、イスラエルの民の言語はヘブル語で、旧約聖書は初めヘブル語で書かれました。つまり私たちが今読んでいる聖書は、このヘブル語から日本語に翻訳されたものだということです。翻訳とはある国の言語を別の国の言語に置き換えることですが、これは本来非常に難しいことなのです。たとえば漢字の「花」は「『草』(冠)が『化』ける」と書きます。これを英語に翻訳すると「フラワー(Flower)」となりますが、これに「草が化ける」というような意味はありません。このように、翻訳にはいつも訳し切れないもの、翻訳することでその言葉や文字が本来持っていた意味が失われたり、あるいは変化してしまうことが多いのです。ですから聖書が初めヘブル語で書き記され、そして日本語に翻訳された時に、失われてしまった意味があるのです。



ヘブル語で「愛する」ことをアーハヴ(אהב)と言います。この言葉はヘブル文字のアーレフ(א)、ヘー(ה)、ベート(ב)の三つの文字を合わせたものですが、ヘブル文字は象形文字と言ってあるものを象った絵からできた文字で、漢字のようにその文字自体に意味があるのです。アーレフ(א)は雄牛の頭を象った文字で、雄牛のように力のある存在という意味から派生して神様ご自身を表す文字と言われていました。そしてヘー(ה)は窓を象った文字で、

そこから「見る」という意味があります。ベート(ב)は家を象った文字です。家族、国という意味があります。これら三つの文字の持つ意味を合わせると「神の見る家」という意味が浮かび上がってきます。つまりヘブル語の「愛する」というアーハヴには、神様が見つめておられる、目指しておられる、計画しておられる家、国すなわち「神様の国」という意味があるのです。これはヘブル語でなければ絶対に読み取ることのできない隠された意味、まさに奥義なのです。このように「愛する人」とは「神様の見る家」である神様の国を信じ、受け入れ、そして待ち望む人を指し示していると考えられます。

4. 聖霊

14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

ここでイエシュアはもう一度「聖霊」について語られています。この「聖霊」が教え、また思い起こさせてくださる「わたしがあなたがたに話したすべてのこと」、すなわちイエシュアが弟子たちに話したすべてのこととは何でしょう。どこにそれが記されているのでしょうか。それは聖書以外には存在しません。ただ聖書にのみそれが記されています。ですから「聖霊」は、聖書を通して「すべてのことを教え」、聖書に記されていることを「思い起こさせて」くださるのです。ですから聖書を読まなければ、「聖霊」からの教えや導きを受け取ることはできません。イエシュアが聖書の預言や律法に忠実であったように、この「聖霊」もまた聖書に非常に忠実な御方です。ですからもし私たちが「聖霊」からの教えや導きを求めるならば、必ず聖書を読まなければならないのです。このように「聖霊」は、必ず聖書を用いて、聖書の御言葉によって私たちの信仰を助けてくださるのです。

14:27 わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたし

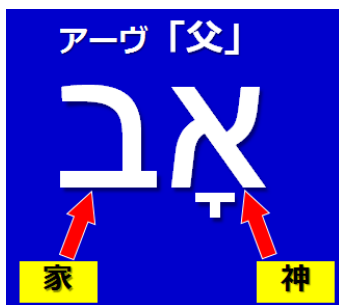
があなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れではありません。

「父があなたがたに聖霊を遣わす」という表現がここでは「わたしは、あなたがたに平安を残します」と言い換えられていると考えられます。ですからこの「平安」は「聖霊」によってもたらされる「平安」です。ですから「世が与えるのとは違う」すなわち人から与えられるものではない、と言っておられるのです。「平安」とは平和、安心、安全、とも言い換えることができる、何の危険も不安も悩みも心配もないこと、まさに「心を騒がす」ことも「恐れる」必要もないことを指します。では人はどんな時に、どのような状態の時に「平安」だと感じるのでしょうか。それは強いもの、大きな存在に守られていると感じる時ではないのでしょうか。子どもが親の存在によって安心して暮らしている様子がその代表的な例です。この親が病気になって弱ったり、またどこか遠くに離れて行ってしまったりすると、子どもは「平安」に暮らしていくことができませぬ。イエシュアは先ほどの 14:18 で「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。」と言っておられますが、私たちは誰の子なのでしょう。私たちに「平安」を与えることができる親とはだれでしょうか。それを指し示すイエシュアの言葉が次に記されています。

5. 父

14:28 『わたしは去って行き、また、あなたがたのところに来る』とわたしが言ったのを、あなたがたは聞きました。あなたがたは、もしわたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くことを喜ばずです。父はわたしよりも偉大な方だからです。

イエシュアがなぜこの世を去って行くのか、その理由がここに示されています。それは「わたしよりも偉大な方」である天の「父」がおられることを示すためです。皆さんはこの「父」という存在にどのようなイメージをもっておられるでしょうか。優しい、強い、信頼できる存在でしょうか。もしくは頑固、厳しい、怖い存在でしょうか。イスラエルの民にとってこの「父」という存在は家族、家庭の象徴的存在であり、家族そのものを指す存在でした。



つまり当時のイスラエル人にとって、「父」のいない家庭は家庭ではない、家とは呼べないということでした。ですから「父」がおられるということは、私たちが平安に暮らしていくことができる「家」があるということと同じ意味なのです。ヘブル語でこの「父」をアーヴ(אב)と言いますが、「神様」を表す文字アーレフ(א)と「家、国」を表すベート(ב)が合わさった文字で、イエシュアが指し示しておられる「父」アーヴとはまさに「神様の家」を表しているのです。

イエシュアはこの世を去って「父」のもとに行き、そして再びこの地上に戻って来られます。それはこの「父の家」にあなたがたを迎え入れるためだと語られました。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

14:1 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでし

よう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

イエシュアは今、あなたがたが住むことができる場所を準備しておられます。この準備が整い次第、あなたがたを迎えに来られます。一般的に「天国」と呼ばれているものがこれです。イエシュアを信じ、語られたこの約束を信じて待ち望む者はすべてそこに、「父の家」に迎え入れられます。

もし今皆さんにとって信頼できる立派な親や保護者がいても、お金があっても健康でも、決してそれらによって与えられることのない「平安」があります。それは皆さんが死んだ後どうなるかということに関する「平安」です。人は誰も死を恐れます。なぜなら死んでしまったら、その後どうなるのかをよく知らないからです。人は知らないこと、見たこと聞いたことのないものを恐れます。しかし一度それが自分にとって良いもの、有益なことであると理解できれば、恐れなくなるどころかむしろ喜んでそれを求めるようになります。神様が与える「平安」とは、皆さんが死んだ後、「父の家」「神様の家」に迎え入れられるという約束を信じることによって得られるものです。イエシュアを信じる、神様を信じるとはまさにそのことを意味します。これを信じることができ、それによって「平安」が得られるように助けてくださる御方が「助け主」である「聖霊」です。そして「聖霊」は先ほども述べたように聖書に記された神様の御言葉によって教え導き、私たちの信仰、神様の約束を信じるという行為を助けてくださいます。

14:29 そして今わたしは、そのことの起こる前にあなたがたに話しました。それが起こったときに、あなたがたが信じるためです。

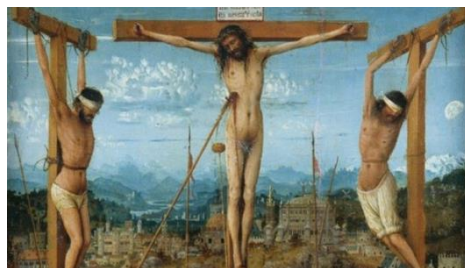
最初に述べたように、「聖霊」によって、「聖霊」の助けが与えられて初めて人はイエシュアを信じ、その語られた御言葉、「父の家」に迎え入れられるという約束を信じるができるのです。「聖霊」の助けなしに、私たちが神様に対する信仰を持つことはあり得ません。

6. 十字架

14:30 わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることはできません。

14:31 しかしそのことは、わたしが父を愛しており、父の命じられたとおりに行っていることを世が知るためです。立ちなさい。さあ、ここから行くのです。

これらのことを語られた次の日、「この世を支配する者」の手によって、イエシュアは十字架にかかれて死なれます。しかしそれは「父が命じられたとおりに行う」こと、つまり神様のご計画であるとイエシュアは言われました。実は今日述べたことが実現するために、つまり「聖霊」の助けによってイエシュアを信じた人たちが「父の家」に迎え入れられるためには、イエシュアにはどうしてもやらなければならないことがありました。それが「十字架刑で死ぬ」ということでした。「十字架刑」はこの当時、最も重い罪を犯し



た犯罪者に課せられる極刑、死刑の中でも最も苦しい、残酷な刑でした。

しかしイエシュアは十字架刑どころか、神様の目から見てもどんな刑罰を受ける必要もない、どんな罪も持っていない御方でした。当時イエシュアを法廷で裁いたローマ帝国の総督であったピラトは、イエシュアについてこのように証言しています。

【新改訳改訂3】ヨハネ 19:4 ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということ、あなたがたに知らせるためです。」

しかし結果的にイエシュアは、無罪であるにもかかわらず十字架刑に処せられます。この不条理な出来事の、その理由が預言者イザヤの書に記されています。

【新改訳改訂第3版】

イザヤ

53:4 まことに、彼（イエシュア）は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

53:7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほぶり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

53:8 しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。

53:9 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。

53:10 しかし、彼を砕いて、痛めることは【主】のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は未長く、子孫を見ることができ、【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。

53:11 彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。

53:12 それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。

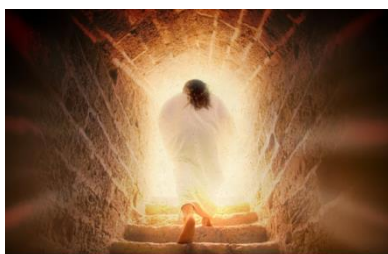
イエシュアは、罪を犯した人たちの身代わりとして十字架にかかられました。その罪を犯した人たちとは誰でしょうか。

【新改訳改訂3】ローマ 3:23 **すべての人**は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができません…

神様の目には、すべての人が罪を犯しており、罪人は神様からの栄誉を受けることができない、つまり「父の家」「神様の家」に迎え入れられることはないということです。しかしただ一人、罪のない御方であるイエシュアが、そのすべての人の罪を身代わりとなって負い、その罰を受けることにより、この事実を信じて受け入れる者に「父の家」「神様の家」に迎え入れられる、神様の子とされる特権が与えられるようになったのです。

【新改訳改訂3】ヨハネ 1:12 **しかし、この方（イエシュア）を受け入れた人々、すなわち、その名を信じ**た人々には、**神の子どもとされる特権**をお与えになった。

7. 復活



イエシュアは、すべての人の罪の身代わりとして罰を受けるために十字架にかかれ、そして死なれました。しかし父なる神様は、死なれたイエシュアをそのままにしておかず、三日目によみがえらせました。しかしただ生き返らせただけではありません。イエシュアに以前とは違う、まったく新しい身体が与えられました。その身体はもはや老いることも衰えることもない、まさに不老不死の身体、永遠不滅の肉体です。父なる神様は天国とも呼ばれる「父の家」「神様の家」に迎え入れられる人は、すべてこのようになる、ということをイエシュアによって示されたのです。つまりイエシュアに与えられたこの永遠に朽ちることのない身体は、信じるすべての人に与えられるということです。これは人の理解や常識をはるかに超えた事実です。ですからこれを信じるには「助け主」「聖霊」が必要なのです。この御方の助けなしに、この事実を信じることはできません。

もしあなたがこの事実を、イエシュアの「十字架による身代わりの死」、そして「復活による永遠の身体」、「神様の家に迎え入れられるという約束」を信じたいと望むなら、聖書に記された神様のご計画、その約束を、「聖霊」によって教えられることを求めてください。またすでにイエシュアを信じている方々にもお勧めします。日々聖書を読み、「聖霊」から教えられることを求めてください。なぜなら信仰とは持ち続け、守り続けるものだからです。私たちはみな弱い存在であることを自覚してください。日々テレビやラジオ、新聞雑誌、インターネットなどによって入って来る世の中の様々な情報や、自分の身の回りに起こる出来事に心を奪われて、私たちの信仰は日々大きく揺さぶられているからです。最後にもう一度言います。日々聖書から、「聖霊」によって教えられることを求めてください。皆さんの毎日に、「助け主」の働きが豊かにありますように。

